

居場所

来談者から「居場所がない」という訴えを聞くことが多い。「行きたくない学校、帰りたくない家庭」…これは教育学者の吉本均氏の言葉だが、学校にも家庭にも身の置き場がない子どものつらさを、せめて家族だけには分かってくれてほしい。

しかし、居場所がない現実、大人にとっても深刻である。これは年間自殺者総数三万人という数値からだけでも想像できる。

ところで、居場所とはどのような場なのか？ それに分からなければ、失われたものを取り戻せるはずがない。前述の吉本氏は「温かな眼差しが注がれる場」と説明しておられる。私たちは確かに温かな眼差しを実感できる場を、居場所と感じるものである。その眼差しに見守られ、その存在を温められてこそ、人は生きる意味を見出すことができるのだと思う。

ではなぜ、温かな眼差しが日本の社会から、すなわち学校・家庭・職場・地域社会から減少したのか？ その理由を、政治や行政を担当する方々にしつかり考えてほしいと私は願っている。この原因を見きわめることなくして教育の再生などできるはずがないからだ。

その意味で、児童・生徒・教師・保護者が善意の眼差しを実感できる社会が実現されることこそ、教育の再生である。現在の日本が悪者探し社会になっていることがとても悲しい。



沢田の杖塾 主宰 森 口 章

(二〇〇七年 六月七日夕刊掲載)